

第6回：まとめ

本シリーズでは、JICA 筑波における野菜栽培技術研修の中で取り上げてきた現地適用の可能性が高いと思われた日本の栽培技術導入による調査事例を4回にわたり紹介してきた。研修員は日本の栽培技術を適用して、地域の野菜栽培問題解決を図るため、個別実験の中でその技術の体験と評価をおこなってきた。以下に、これまで紹介した内容をまとめた。

研修員国	地域の野菜栽培問題	対応する栽培技術等	現地適用課題
フィリピン	トマト栽培における土壌病害	接ぎ木技術	接ぎ木による収量・品質への影響。接ぎ木と順化技術の訓練。経済面での検討。台木の入手。
ニカラグア	パレイショ栽培における優良種イモ不足	体系的種イモ生産と配布システム	輸入種イモの品質管理の確立。適正サイズの評価試験と展示圃による普及技術の紹介。
サモア	トマトの放任栽培における低収量	整枝・誘引栽培技術	整枝・誘引作業による労力・経済面の影響。芯止まりトマトの誘引手法の開発。
モンゴル	キャベツ栽培における難防除害虫害	選択性農薬や異なる剤の輪番使用	総合的病害虫防除について組織だった研究と展示圃による普及技術の紹介。

この他にも、エチオピアの乾燥地域における定植トマト苗の低活着率問題に対応するための練り床育苗、ケニアでは廃棄物とされた養鶏糞の発酵による有機肥料製造、ニカラグアの有機栽培における害虫害に対するマルチ栽培（シルバーマルチ）などの日本栽培技術を取り上げ、研修員の抱える栽培上の問題解決に取り組んできた。研修員はこの様な技術について知識としては多少持っていたが、実際の栽培に適用した経験は乏しい。研修では、まず野菜栽培の基本技術の習得をはかり、その応用技術として篤農家の経験・知恵を学び、自国の栽培環境への適用性について評価・検討するようにした。しかし、現地での適用に際しては種々の課題が想定された。

挿し接ぎ・整枝誘引・練り床育苗や鶏糞の醗酵などの技術には特別な資材や機器を必要としないため、現地での適用は容易と考えられる。一方、選択性農薬やシルバーマルチなどの資材、および種イモ生産体系のようなシステムの構築を伴うものは適用が難しい。日本の栽培技術を現地で適用していく上では、現地の自然環境および営農条件での技術の再評価が共通の課題と言えるが、この課題を克服するための手法として、一昔前の日本の技術普及（国や県の研究員が農家の技術導入に対し積極的に関わり、農家も日常の営農の中で考えた工夫を研究員に紹介することによって次の技術開発へと繋げ、普及員との連携により、技術開発と普及の輪を上手く回していた）の方法がお手本となるだろう。

日本の栽培技術を学んだ帰国研修員が、習得技術をベースに現地で適用可能な技術を確立し、その技術普及に取り組むことが研修の成果として期待されていることを考えると、個別実験結果の現地での適用に必要な工夫の再検討に十分なフォローアップが必要と考えられる。しかし、フォローアップが十分に実施されていない状況では研修員の帰国後の活動の本当の課題が見えてこない。このような課題を解決する方法として、研修とフォローアップをペアにした研修形態の実施が必要と考える。さらに、以前にも述べたように、技プロ等の他のスキームとの連携強化も考えられるであろう。

日本の栽培技術や篤農家の知恵の中には、身の回りの資源を活用する方法を考案し有効利用を図っている技術や知恵が沢山あり、途上国においても適用できるものとする。「本邦での技術研修への実施」と「研修員の国々での多くの活動」の両方の経験を持つ当社としては、多くの課題を克服していかなければならない研修員に対して真に役立つ技術協力を展開していきたい。